

中日両国常用漢字字体の対 照比較

頼錦雀

- 一、始めに
- 二、中華民国の常用国字の字体
- 三、日本の常用漢字の字体
- 四、中日両国常用漢字字体の対照比較
- 五、終りに

注
参考文献

一、始めに

漢字はもともと中国のものだから、中国人の日本語学習者にとっては、絶対に問題なしと私は思ったが、前期比較言語学の授業の時間に、戸田先生が、中国語では「戸」を「戶」と書くが、日本語では「戸」と書いていると注意されて、始めて中日両国漢字字体の違いに気が付いた。中国の日語学習者が書く漢字字体のことについてを知るために東呉大学日本語学科三年生の作文からサンプルを取出して調査を行ったが、その結果（表一）を見ると、正しく日本語を表記するには、やはり中日両国の漢字字体を対照比較する必要がある、としみじみ感じた。

作文における漢字誤字使用率

氏名	題 目	延べ語数	漢 字			
			延べ語数	誤 字		
				延べ語数	中国の字体の干渉による誤字 延べ語数 比	率
A	私の人生観	275	116	18	7	38.89 %
B	一九七九年をふりかえって	411	154	14	11	78.57 %
C	学問の重要性	456	137	7	7	100.00 %
D	音楽について	449	134	20	13	65.00 %
E	外国語を話すこと	258	85	11	8	72.73 %
F	新年の新しい希望	466	197	54	27	50.00 %
G	サラリーマンの生活	317	111	18	4	22.22 %

（注） もともとの題目は「自由題」である。
時は1980年1月である。

（表一）

一、中華民國の常用国字の字体

漢字の字体は、歴史の産物であり、一時的に生じたものではない。中国では、一番古い文字は甲骨文だが、そのほかに、籀、篆、隸、楷などの字体がある。秦代に、「小篆」で文字を統一したが、文字を科学的に整理した最初のものである。漢代には「隸書」が慣用されたが唐代には「楷書」が流行した。宋代になると、印刷術が発明されたために、いわゆる「宋體」が使われるようになった。今日では、「宋體」と「楷書」とが両方とも慣用されている。

では、民国以降官方が漢字の字体についてどんな態度を取ったかを考察してみよう。

(イ) 教育部『小學初級分級暫用字彙』

これは、教育部が民国二十四年（一九三五）、当時の小学校の教科書を中心として、王文新氏『小學分級字彙』、陳鶴琴・敖弘德氏『語體文應用字彙』、平民教育促進會『基本通用字彙』、莊澤宣氏『基本字彙』、杜佐周氏・蔣成堃氏『兒童與成人常用字彙』等を参照して編纂したものである。

この『暫用字彙』を編纂する時、いくつかの規則を決めたが、その中に字体に関するものが四つあった。

- 一、一字に二つの字形があるもの——例えば「晒曬」、「煙烟」、「僱雇」、「輦輦」などは、その簡体字を採用し、繁体字をカッコに入れること。
- 一、示、衣、走、食、良などの字が、へんである場合、それぞれ^衤、^礻、^辶、^饣、^艮に変形して、その画数が変形字のそれに準じること。
- 一、井、研、既、爲などの宋体字が、一般の書写では、井、研、既、爲に変形して、その画数も変形字に準じること。
- 一、片、巨、臣……などの画数が、書写の場合、おのおのの習慣によって違うが、今は一一字典を引いてそれを確かめること。

この『暫用字彙』は、もともと三年間試用する予定だったが、戦争のために、そのままになった。

(ロ) 教育部『漢字注音字模表』

これは、民国二十四年（一九三五）、教育部が「教育部國語統一籌備委員會」の注音符号を提唱すべしという意見を採用して発表したものである。その漢字は、仿宋長体である。

この表には、異体のある字は、もっとも普通化したものを本字とし、ほかの異体字をすべてカッコに入れて、その本字の下につけることにした。慣用された簡体字もその中に含めてある。

(ハ) 國立編譯館『國民學校常用字彙研究』

社会の変遷、科学の進歩に従って、一般の用字の傾向を参考して「常用字彙」を編纂する必要がある、という考え方から、國立編譯館で、教育部國民教育司の監督の下に四年間研究され、民国五十六年（一九六七）に、この『國民學校字彙研究』を発表したのである。

この研究は、漢字の使用度数に重点をおいたが、字体についても、次の四つの原則がある。

- 一、字彙表には、宋体と楷書体とを並列すること。
- 一、宋体は、原資料によることを原則とするが、もしいくつかの字体がある場合は、康熙字典を本として取捨選択すること。但し、康熙字典の採用したのが訛体である場合、合理的な書き方に準じること。例えば、凜→凜、屯→屯。
- 一、楷書体は原資料によって、その使用度数の一番高いものを主とすること。例えば、青→青、全→全。
- 一、字体が二つ以上あり、しかもそれがお互いに書きかえられるものは、全部一つの番号に入れることにし、その度数の高いものを主

として、慣用の異体字をその後につけること。——行書と訛体とは示さないが、必要なき、注として説明する。慣用の簡体字や俗字にもその使用度数を付ける。

(二) 教育部『常用國字標準字體表』

以上のべたのは、すべて小学校の常用字に重点を置き、主になされた仕事は字彙の多少の分析に止まって、字形の分析には触れていなかったのである。教育部が発表した『注音漢字字模』が始めての標準字体だが、それが注音銅模である。だから、いままで、標準字体は一度も統一したことがないといえよう。それがために、民国六十一年（一九七二）八月、教育部社會教育司が國立師範大學國文研究所に委託して、常用國字及びその標準字体を研訂させることにした。

この標準字体の研究は、おもな目的が制限された字の字形を統一して、正確な語義を伝達させるというのであるから、いろいろなことを考えながら、印刷体と書写体とを折衷して、標準字体を決めたのである。その基本的原則は次のように確定されている。

一、正字と俗字との区別：その区別する基準は左の三つである。

(1) 古今の別によること。

(2) 造字の原則に合うかどうかによること。

(3) 本字のほか、その略体字、繁体字、訛字すべてを俗字とすること。

一、標準字体の体例説明：五つの原則がある。

(1) 字体が多くある字は、もし、正体が繁体で、慣用されないが、俗体が簡体で、慣用されている場合、その俗体字に準じること。

(2) 字体が正、俗二つある字は、俗字が慣用されているものだったら、その画数の多少を問わず、すべて俗字に準じること。

(3) 字体が二つあり、しかし正、俗の別がない字は、画数の少ないものに準じること。

(4) 古、籀、篆などの字体がある字は、その慣用体（すなわち楷書体

）に準じるが、もし三つとも慣用体であつたら、その画数の少ないものに準じること。

(5) 字体が二つあり、その意味が昔は同じだったが、今違っている字は、別々にすること。

右の基本原則では、省筆——つまり簡体字を俗体と認める。では、一般には簡体字をどう考えられているか。

台湾省參議會第十一次大會——民國四十年（一九五〇）六月十一日（六月二十三日）に、馬有岳參議員は、常用簡易漢字を制定しようという意見を提出した。この意見は大会で通過されたが、民國四十二年（一九五三）、台湾省政府は教育部に命ぜられて、學生が簡体字や日化漢字を書くべからずということを発表した。しかし、同年四月に、教育部は民意機關の要求に應じて「簡化文字座談會」をひらいて「簡體字研究委員會」を創立した。

九月十日、羅家倫氏が中国の文字を保存するために大衆が覚えやすいように、それを簡体化すべしという意見を提出した。

十二月十六日、蔣介石大總統が、簡体字を提唱することがはなはだ必要であると指示された。

民國四十三、四十四年に、いわゆる簡体字運動が盛んに行なわれた。四十五年（一九五六）中国大陸が拉丁化簡体字を使い始めたから、教育部は、學生が簡体字を書くことを禁じた。

が、五十八年（一九六九）四月十日、何應欽氏も「整理簡筆字案」を提出した。林語堂氏も五月二十八日に同じ意見を提出した。

しかし、今日まで、簡体字についての結論がはっきりしないようである。

簡体字は公に認められないが、これを用いる人は少なくはない。葉公超氏一般に用いられる簡体字について次のような分類原則を提出した。

一、殆どの字は、その部首やへん、つくりを変えないこと。

一、「與↓与」、「興↓興」の外に、「學」の「𠂔」のような、三つ

並んでいる部分にその左側と右側とが同じである場合、その部分を「ツ」に変形すること。

一、上部が「𠂔」であるものを「亦」に変形すること。

一、「權」のような、簡単な部分と複雑な部分を含んだ字は、その複雑な部分を「又」に変形すること。

一、「門」はすべて「冂」に変形すること。

一、六画以上の字でなければ簡体化しないこと。なお、筆写に不便な字を簡体化すること。例、亞→亜。

三、日本の常用漢字の字体

日本は古くから漢字を使っているが、漢字に対する議論がなかった訳ではない。

漢字を廃止したり、制限したりする意見が多かったが、大正時代までには、漢字の字数のことに止まっていた。

大正八年（一九一九）になると、文部省は小学校の教科書用漢字二千六百余字を整理して「漢字整理案」を発表した。

大正十二年（一九二三）、臨時国語調査会は「常用漢字表」を発表した。その総字数は一九六二字であって、略字が一五四字である。

大正十四年十一月、臨時国語調査会は、又「字体整理案」を発表した。その整理方針は次のようである。

一、本案ハ先キニ發表シタ常用漢字表ニツキ、ソノ字体ヲ整理シタモノデアル。

一、本案ハ康熙字典ノ字体ヲ本トシ、コレヲ整理スルニ當リ、現代人ノ慣用ヲ深く考慮シ、字畫ノ簡易ト運筆、便利トニ重キヲ置キ、字形ノ鈎合ヲ整ヘ小異ノ合同ヲ圖ツタモノデアル。

昭和十六年（一九四一）、臨時国語調査会は、大正十二年に発表した「常用漢字表」から一四七字を削って、新たに四十五字加えて、総数一八五八字の「常用漢字表」を発表した。

昭和十七年（一九四二）六月、国語審議会は「標準漢字表案」二五二八字（常用漢字一一三四字、準常用漢字一三二〇字、特別準用漢字七四字、その中に略字一四二字）を提出した。十月、文部省はそれを改正して——常用、準常用、特別準用の区別をなくして、字数を二六六九字までふやした。その中の略字を八〇字すてて——「標準漢字表」を発表した。

昭和二十一年（一九四六）、「従来、わが国において用いられる漢字は、その数にはなほ多く、その用いかたも複雑であるために、教育上また社会生活上、多くの不便があった」という理由で、国語審議会による「当用漢字表」が公布された。当用漢字表は、総字数が一八五〇字であるが、略体字は一三一字である。

昭和二十四年、「当用漢字表」の中で、すでに簡易字体を認めた考えをさらに徹底させるために、当用漢字字体表を公布した。その選定にあたっては、異体の統合、略体の採用、点画の整理などをはかるとともに、筆写の習慣、学習の難易をも考慮した。が、この字体表は、印刷字体と筆写字体とをできるだけ一致させようとしながら、尚そのおもな目的は活字体を統一するにあった。従って、筆写体のために「使用上の注意事項」を添えて、いわゆる許容を認めた。

昭和四十一年、国語審議会に対し、文部大臣が当用漢字表などについて再検討の要があるとし、その改善の具体案について諮問がなされた。四十七年から具体的な検討が始められたが、九年間をへて、国語審議会が昭和五十六年（一九八一）三月二十三日に、「常用漢字表」をとりまとめて、文部大臣に最終答申した。これは、常用漢字表の一八五〇字を全部とりいれ、新たに九十五字をふやしたものであるが、今年の十月ごろ、内閣公示で正式に採用される予定の筈である。

字体については、文字の骨組みという考えを取り、「燈」を「灯」に変更する以外は現行と変わらない。漢字表では明朝体活字を使っているが、他の活字でもデザインの違いなどは問題としないことにしている。

四、中日両国常用漢字字体の対照比較

次は、中華民国教育部「常用國字標準字體表」と日本「常用漢字表」を字体について比較してみたい。

「常用國字標準字體表」には「勺、匆、込、扱、町、坂、咲、勅、峠、烟、俵、砲、菓、紺、酢、碁、鑛、滝、働、銃、銃、踊、諮、嬢、薦、曇、曜、繰、渦、堀、梓、岬、霧、駄、塀」など三十五字に対応する常用国字が見当たらないから、それを比較することができない。

ほかの一九一〇字の字体を対照比較するにおいては、当用漢字字体表によると、言ー言、一ー一、雨ー雨、糸ー糸、扁のみなどがいわゆる許容であるから、これを考慮に入れながら、又便宜のため、文化圖書公司『辭集』から中国の常用国字に当る簡体字を取り出し、その外の私が知っている略体字を考えると、次の結果がえられる。

一、常用国字では、それぞれ意味が違っているが、常用漢字では異体の統合によって一字になったものが六字ある。

予豫ー予、余餘ー余、欠缺ー欠、缶罐ー缶、虫蟲ー虫、効效ー効

一、常用国字では「妝、裡、吃」の字体を取るが、常用漢字では、常用国字の或体の「粧、裏、喫」を取る。

一、常用国字では「勛、鬥」は簡体を標準字体とするが、常用漢字ではその繁体「勲、鬪」を取る。

一、常用国字では「著、或作着」、つまり一字であったが、常用漢字では「著」、「着」がべつべつである。

一、常用国字では、その字体が常用漢字のと違うものが三七二字ある。それを次のように分類できる。

- 1 簡体字があるのは一三九字ある。その中には
 - a 字体が常用漢字のと同じものが六五字ある。(表二、表三)
 - b 字体が常用漢字のと類似しているものが二五字ある。(表四)
 - c 字体が常用漢字のと全然違うものが四九字ある。(表五、表六)

一、常用国字に当る簡体字のあるものが八九字ある。(表八)

二、簡体字のないものが二三三字ある。(表七)

三、常用国字の字体が常用漢字と同じものは一四三八字あるが、その中、常用国字に当る簡体字のあるものが八九字ある。(表八)

表二、『辭集』にある、常用国字に当る簡体字の字体が常用漢字のそれと同じもの (注は『辭集』にないが、私が知っている略体字。以下同)

贊	蚕	碎	号	猷	繼	旧	学	画	絵	会	医	惡	亜	漢字常用国字の簡体字	日
贊	蠶	碎	號	猷	繼	舊	學	畫	繪	會	醫	惡	亞	漢字常用国字の簡体字	中
贊	蚕	碎	号	猷	繼	旧	学	画	絵	会	医	惡	亜	注	
属	総	窓	争	双	声	数	随	尽	囑	浄	条	肅	辭	漢字常用国字の簡体字	日
屬	總	窗	爭	雙	聲	數	隨	盡	囑	淨	條	肅	辭	漢字常用国字の簡体字	中
属	総	窓	争	双	声	数	随	尽	囑	浄	条	肅	辭	注	
麦	独	党	当	灯	点	鉄	通	昼	胆	担	断	台	体	漢字常用国字の簡体字	日
麥	獨	黨	當	燈	點	鐵	遞	晝	膽	擔	斷	臺	體	漢字常用国字の簡体字	中
麦	独	党	当	灯	点	鉄	通	昼	胆	担	断	台	体	注	
湾	弯	楼	炉	礼	励	乱	万	宝	猫	冰	蜜			漢字常用国字の簡体字	日
灣	彎	樓	爐	禮	勵	亂	萬	寶	貓	冰	蜜			漢字常用国字の簡体字	中
湾	弯	楼	炉	礼	励	乱	万	宝	猫	冰	蜜			注	

表三、『辭彙』には、常用国字に当る簡体字が二つあるが、その中の一つの字体が常用漢字のそれと同じもの。

挙	覚	塩	漢字	常用	日
舉	覺	鹽	国字	常用	中
挙	覚	塩	の簡体字	『辭彙』	
挙	覺	塩		注	
遅	乘	処	漢字	常用	日
遲	乘	處	国字	常用	中
遅	乘	処	の簡体字	『辭彙』	
遅	乘	處		注	
誉	与	变	漢字	常用	日
譽	與	變	国字	常用	中
誉	与	变	の簡体字	『辭彙』	
誉	與	變		注	
両	覽		漢字	常用	日
兩	覽		国字	常用	中
両	覽		の簡体字	『辭彙』	
両	覽			注	

表四、『辭彙』にある、常用国字に当る簡体字の字体と常用漢字のそれと類似しているもの、

穩	毆	欧	营	榮	隱	压	漢字	常用	日
穩	毆	歐	營	榮	隱	壓	国字	常用	中
穩	毆	欧	营	榮	隱	压	の簡体字	『辭彙』	
	毆	欧						注	
県	輕	經	驅	区	拋	関	漢字	常用	日
縣	輕	經	驅	區	據	關	国字	常用	中
县	輕	經	驅	区	拋	関	の簡体字	『辭彙』	
					据			注	
県	輕	經	驅	区	拋	関			
枢	繩	称	寿	実	济	国	漢字	常用	日
樞	繩	稱	壽	實	濟	國	国字	常用	中
枢	繩	称	寿	実	济	国	の簡体字	『辭彙』	
枢								注	
	劳	辺	単	対			漢字	常用	日
	勞	邊	單	對			国字	常用	中
	劳	辺	単	対			の簡体字	『辭彙』	
								注	

表五、常用国字の字体が常用漢字のそれと類似し、しかも『辭集』にはそれに当る簡体字があるもの、

啓 鷄 響 戲 觀 歡 漢 穀 懷 壞	漢字	常用	日
啓 鷄 響 戲 觀 歡 漢 穀 懷 壞	国字	常用	中
启 鸡 响 戏 观 欢 汉 壳 怀 坏	の簡体字	『辭集』	中
	注		
衆 雜 掃 殺 歲 穀 顧 懸 驗 權	漢字	常用	日
衆 雜 掃 殺 歲 穀 顧 懸 驗 權	国字	常用	中
众 杂 扫 杀 岁 谷 顾 悬 验 权	の簡体字	『辭集』	中
	注		
腦 惱 難 聽 遷 錢 戰 讓 所 從	漢字	常用	日
腦 惱 難 聽 遷 錢 戰 讓 所 從	国字	常用	中
脑 恼 难 听 迁 分 战 让 所 从	の簡体字	『辭集』	中
	注		
練 靈 類 離 樂 脈 賓	漢字	常用	日
練 靈 類 離 樂 脈 賓	国字	常用	中
练 灵 类 离 乐 脉 宾	の簡体字	『辭集』	中
	注		

表六、『辭集』にある、常用国字に当る簡体字の字体と常用漢字のそれと大分違ったもの。

氣 拡 価	漢字	常用	日
氣 擴 價	国字	常用	中
气 扩 价	の簡体字	『辭集』	中
	注		
寫 齋 歸	漢字	常用	日
寫 齋 歸	国字	常用	中
写 斋 归	の簡体字	『辭集』	中
	注		
廢 囧 庁	漢字	常用	日
廢 圖 廳	国字	常用	中
废 图 所	の簡体字	『辭集』	中
	注		
浜 発 売	漢字	常用	日
濱 發 賣	国字	常用	中
滨 发 卖	の簡体字	『辭集』	中
	注		

表七、常用国字の字体と常用漢字のそれと違い、しかも『辭集』にはそれに当る簡体字がないもの。

獲 悔 仮 奥 桜 応 縁 鉛 沿 駅 逸 尅 罍	漢字	常用	日
獲 悔 假 奥 櫻 應 緣 鉛 沿 驛 逸 壹 罍	国字	常用	中
应	注		
曉 虐 儀 器 寬 陷 卷 轄 褐 割 渴 喝 穫	漢字	常用	日
曉 虐 犧 器 寬 陷 卷 轄 褐 割 渴 喝 穫	国字	常用	中
	注		
溪 揭 惠 莖 徑 薰 隅 遇 偶 愚 具 謹 勤	漢字	常用	日
溪 揭 惠 莖 徑 薰 隅 遇 偶 愚 具 謹 勤	国字	常用	中
莖 徑	注		
戸 敞 顛 憲 檢 圈 劍 儉 肩 潔 擊 携 敬	漢字	常用	日
戸 嚴 顛 憲 檢 圈 劍 儉 肩 潔 擊 攜 敬	国字	常用	中
顛	注		
産 慘 棧 参 黒 港 黄 広 護 誤 娛 呉 雇	漢字	常用	日
産 慘 棧 参 黒 港 黄 廣 護 誤 娛 呉 雇	国字	常用	中
惨 棧 参	注		
術 述 洩 臭 収 釈 捨 舍 湿 兒 姉 市 残	漢字	常用	日
術 述 澀 臭 收 釋 捨 舍 濕 兒 姊 市 殘	国字	常用	中
湿 兒 残	注		
殖 植 釀 壤 孃 疊 剩 狀 獎 燒 涉 將 叙	漢字	常用	日
殖 植 釀 壤 孃 疊 剩 狀 獎 燒 涉 將 敘	国字	常用	中
	注		
静 瀨 髓 穂 醉 粹 尋 慎 寢 真 浸 侵 触	漢字	常用	日
靜 瀨 髓 穂 醉 粹 尋 慎 寢 真 浸 侵 觸	国字	常用	中
触	注		

七
(一)

装 巢 插 搜 莊 壯 禪 織 潛 踐 船 扇 淺 專 撰 雪 切	漢常用字	日
装 巢 插 搜 莊 壯 禪 織 潛 踐 船 扇 淺 專 攝 雪 切	國常用字	中
踐 淺	注	
值 彈 团 嘆 濯 沢 沢 滯 帶 臧 贈 藏 憎 增 騷 層 僧	漢常用字	日
值 彈 團 嘆 濯 澤 擇 滯 帶 臧 贈 藏 憎 增 騷 層 僧	國常用字	中
	注	
胴 糖 稻 盜 唐 冬 伝 転 呈 塚 鎮 直 懲 徵 鑄 置 致	漢常用字	日
胴 糖 稻 盜 唐 冬 傳 轉 呈 塚 鎮 直 懲 徵 鑄 置 致	國常用字	中
付 轉	注	
縛 薄 博 梅 拜 霸 寧 妊 任 弑 内 鈍 屯 屈 突 毒 德	漢常用字	日
縛 薄 博 梅 拜 霸 寧 妊 任 貳 内 鈍 屯 屈 突 毒 德	國常用字	中
	注	
遍 偏 仏 払 侮 敷 婦 敏 頻 微 碑 扉 秘 繁 判 拔 髮	漢常用字	日
遍 偏 佛 拂 侮 敷 婦 敏 頻 微 碑 扉 祕 繁 判 拔 髮	國常用字	中
	注	
每 沒 墨 帽 冒 肪 房 飽 豐 胞 泡 抱 邦 包 簿 步 編	漢常用字	日
每 沒 墨 帽 冒 肪 房 飽 豐 胞 泡 抱 邦 包 簿 步 編	國常用字	中
丰	注	
緑 獵 虜 隆 竜 頼 来 謠 様 揺 躍 藥 訳 黙 耗 満 膜	漢常用字	日
綠 獵 虜 隆 龍 頼 來 謠 樣 搖 躍 藥 譯 默 耗 滿 膜	國常用字	中
末 葯	注	
虞 腕 録 鍊 練 歴 曆 戾 壘 淚	漢常用字	日
虞 腕 錄 鍊 練 歷 曆 戾 壘 淚	國常用字	中
	注	

表八、常用国字の字体が常用漢字のそれと同じ、しかも『辭集』にはそれに当る簡体字があるもの。

閑 間 堪 勘 掛 開 禍 過 遠 園 陰 異 為 愛	漢常用 字用	日
閑 間 堪 勘 掛 開 禍 過 遠 園 陰 異 為 愛	国常用 字用	中
闲 间 堪 勘 挂 开 祸 过 远 园 阴 异 为 爱	の『辭集 字』	
	注	
賢 橋 協 窮 議 擬 儀 義 偽 機 棄 環 還 管	漢常用 字用	日
賢 橋 協 窮 議 擬 儀 義 偽 機 棄 環 還 管	国常用 字用	中
贤 桥 协 穷 议 拟 仪 义 伪 机 弃 环 还 管	の『辭集 字』	
賢 穹	注	
儒 種 質 執 時 事 紙 師 際 懇 剛 興 個 繭	漢常用 字用	日
儒 種 質 執 時 事 紙 師 際 懇 剛 興 個 繭	国常用 字用	中
仔 耘 质 执 时 事 帑 师 际 恳 刚 兴 个 茧 种	の『辭集 字』	
	注	
壇 第 孫 卒 喪 節 聖 勢 世 親 職 場 傷 笑	漢常用 字用	日
壇 第 孫 卒 喪 節 聖 勢 世 親 職 場 傷 笑	国常用 字用	中
坛 第 孙 卒 丧 节 圣 势 世 亲 职 场 伤 关 节	の『辭集 字』	
职	注	

八一

頭 等 答 凍 東 陳 張 帳 長	漢常用 字	日
頭 等 答 凍 東 陳 張 帳 長	国常用 字	中
头 等 荅 冻 东 陈 法 祛 去	の『辭集』 簡体字	
	注	
墳 風 筆 備 罷 飛 閥 農 熱	漢常用 字	日
墳 風 筆 備 罷 飛 閥 農 熱	国常用 字	中
坟 风 笔 备 罢 飞 阙 农 热 笔 备	の『辭集』 簡体字	
风	注	
葉 憂 問 門 娘 務 報 閉 聞	漢常用 字	日
葉 憂 問 門 娘 務 報 閉 聞	国常用 字	中
叶 憂 问 门 奴 务 报 闭 闻	の『辭集』 簡体字	
	注	
解 麗 臨 留 羅 養	漢常用 字	日
解 麗 臨 留 羅 養	国常用 字	中
鮮 丽 临 留 罗 养	の『辭集』 簡体字	
	注	

(八二)

五、終りに

以上述べた結果を見ても、中国人が日本語を表記する上にいかに間違
が起こりやすいものかが分ると思う。

てんな、両者を対照比較するのに原則があるようで実は何もない場
合、われわれは用心深く、常用漢字の字体を一つ一つ確かめて、始めて
正しく日本語を表記することができると思う。

注

- (1) 国立編譯館『國民學校常用字彙研究』ペ七。
- (2) 前掲書ペ八。
- (3) 前掲書序ペ一。
- (4) 教育部『常用國字標準字體表』ペ九。
- (5) 前掲書ペ二四。
- (6) 前掲書ペ二四、二五。
- (7) 張博宇『臺灣地區國語運動史料』ペ一五八。
- (9) 前掲書ペ一六一。

- (10) 前掲書ペ一七四。
- (11) 前掲書ペ一九八。
- (12) 前掲書ペ一九九。
- (13) 葉公超「談簡體字」(『華文世界第十八期』)。
- (14) 一九八一年三月二十四日朝日新聞による。
- (15) 以上二十八字は蔡茂豊「中日両国常用漢字の対照比較」『東吳日本語教育第5号』による。
- (16) 日本書道教育研究所『現代字体字典』参照。

参考文献

中国語の部分

國民學校常用字彙研究 國立編譯館 臺灣中華書局

民国五十六年

臺灣地區國語運動史料 張博宇 商務印書館

民国六十三年

辭彙(增訂本) 文化圖書公司

民国六十五年

常用國字標準字體表(訂正本) 教育部 正中書局

民国六十七年

華文世界第十八期 華文世界編輯委員會

民国六十八年

日本語の部分

現代字体字典 日本書道教育研究所 講談社

一九六九年

国語学辞典 国語学会 東京堂

一九七五年

日語文語問題的研究 蔡茂豊 大新書局

民国五十八年